

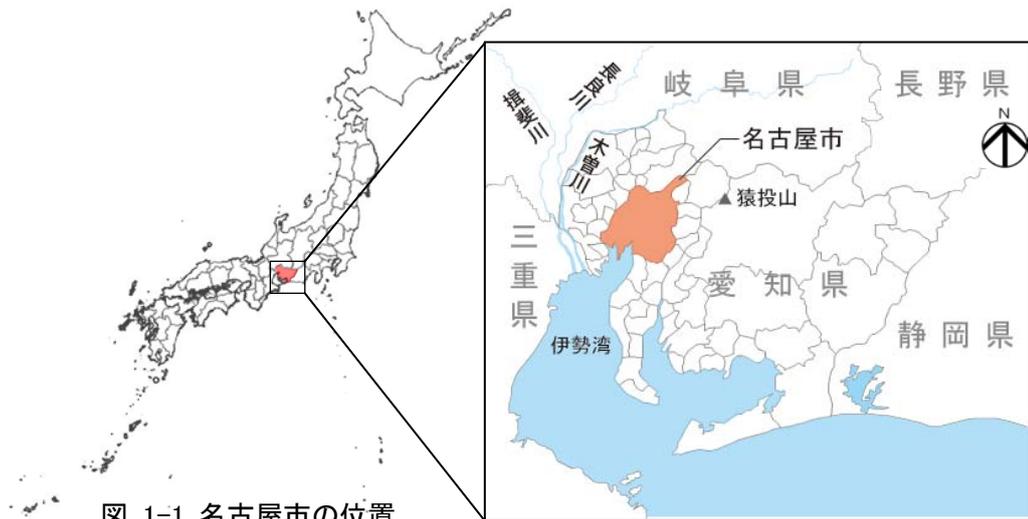
1章 名古屋市の歴史的風致の背景

1 市の概要

(1) 自然的環境

①位置

名古屋市は、日本の国土のほぼ中央、木曾・揖斐・長良の木曾三川によって形成された濃尾平野の東に位置し、南は伊勢湾に面し、名古屋港を構成している。東京から新幹線で2時間弱、大阪からは1時間弱の地点に位置し、全国的な物流等において有利な条件を備える。



②地形

名古屋市の市域は、東西約24km、南北約25km、面積326.43k²に及び、標高は、守山区にある東谷山山頂の198.3mを最高点とし、港区茶屋四丁目の-1.73mを最低点とする。市の地形は、東部の丘陵地、中央部の洪積台地、北・西・南部の沖積地の3つに大きく分けられる。

市の東部には、瀬戸市・豊田市に位置する標高629mの猿投山へと連なる標高70m前後の低位丘陵が広がっている。この地域は、良質の粘土を産することから、古墳時代から鎌倉時代の初めにかけて、一大窯業生産地となった。地質は新生代第3紀層の安定した地盤で、現在は良好な住宅地として利用されている。

市の中央部には、標高10~16m前後の名古屋台地・熱田台地・瑞穂台地・笠寺台地などの洪積台地が南北に伸びる。これらの台地縁辺には、縄文時代以降、集落が形成され、早くから人々の居住地として利用されてきた。台地の南方一

帯は、古代には干潟のような景観で、『万葉集』にも「桜田へ^{たづ}鶴鳴きわたる^あ年魚市潟^{ゆちがた} 汐干にけらし 鶴鳴き渡る」と歌われている。また、名古屋台地の西北端には、慶長 15 年 (1610)、徳川家康によって名古屋城が築かれた。この地はすぐ北側の沖積低地より約 10m 高く、北及び西方に濃尾平野が一望できる城造りにはうってつけの場所であった。一方、名古屋台地の南側に伸びる熱田台地には、南端に尾張氏の鎮守熱田社 (熱田神宮) が鎮座し、古代以来、湊町・漁師町・宿場町・門前町という複合した機能を有する町として発展した。

市の北及び西方には、庄内川に面した平坦な沖積地が広がる。水利のよい稲作地帯として、古代以降豊かな農地として利用され、「富田^{とみたのしょう}荘」「安食^{あじきのしょう}荘」などの荘園も営まれた。南は伊勢湾を臨む海拔 0m 以下の低地帯で、江戸時代以降、新田開発や工業用地として埋め立てられ、明治期に整備された港湾とともに工業都市名古屋を支えてきた。

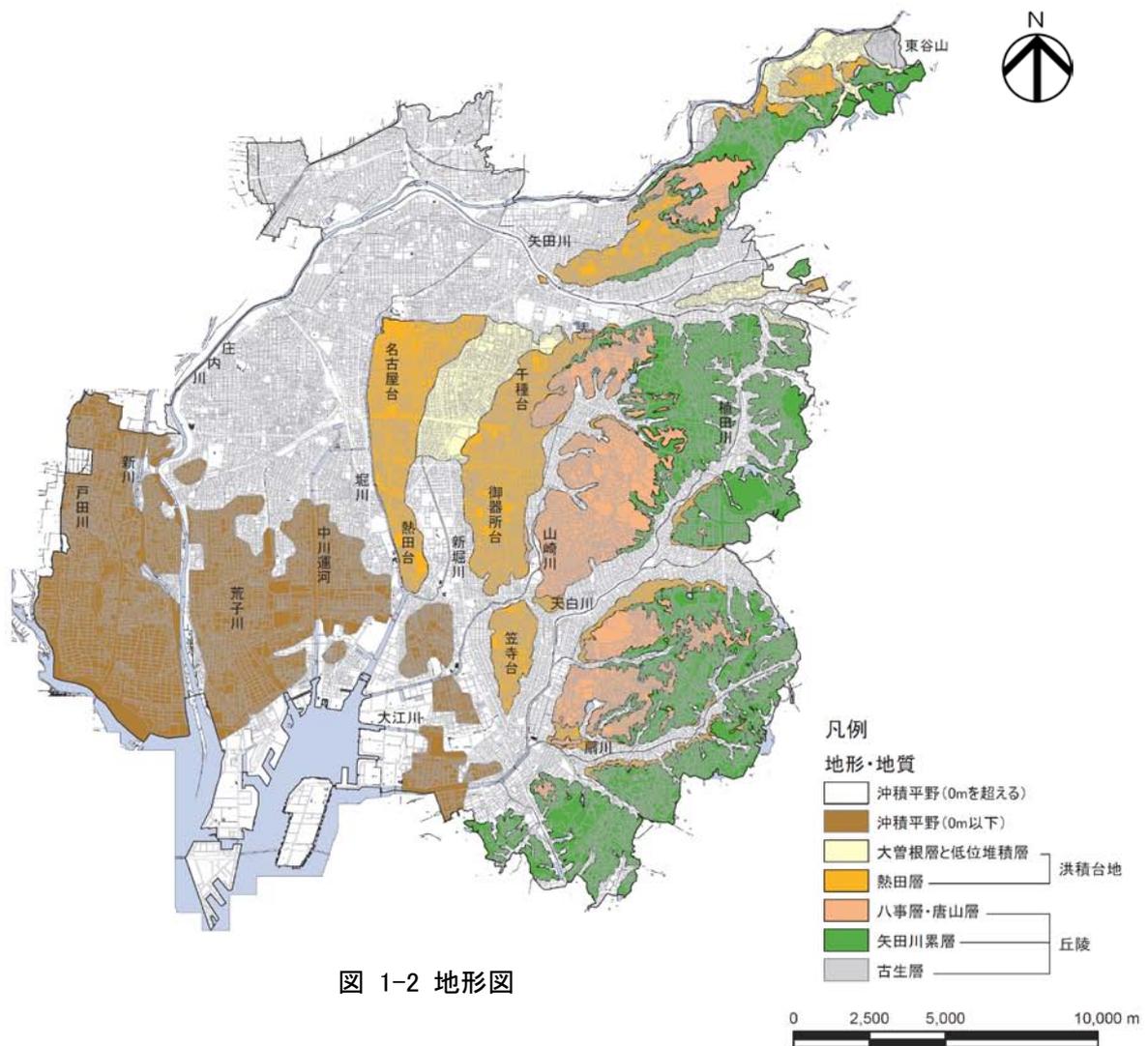


図 1-2 地形図

③気候

名古屋の気候は、温帯気候の温暖湿潤気候に分類される。夏は蒸し暑く、冬は伊吹おろしと呼ばれる冷たい北西の季節風が吹いて明け方の冷え込みが厳しい。最暖月と最寒月の平均気温の差は大きく、季節の変化は明瞭である。降水量は、日本の平均値よりもやや少ない。

このような気候条件のもと、名古屋市内では、シイやカシからなる常緑広葉樹林帯が守山区の東谷山地域などに散見される。また、熱田神宮の社叢は比較的自然な状態で残されており、熱田神宮境内が古くから神域として守られてきたことを伝えるとともに厳かな雰囲気醸し出し、歴史的風致形成の背景となっている。

【気象データ（1981～2010年の平均値）】

気温	平均 15.8℃、最高 32.8℃、最低 0.8℃
平均湿度	66%
日照時間	2,091.6 時間
降水量	年間 1,535.3 ミリ

名古屋地方気象台ホームページより作成

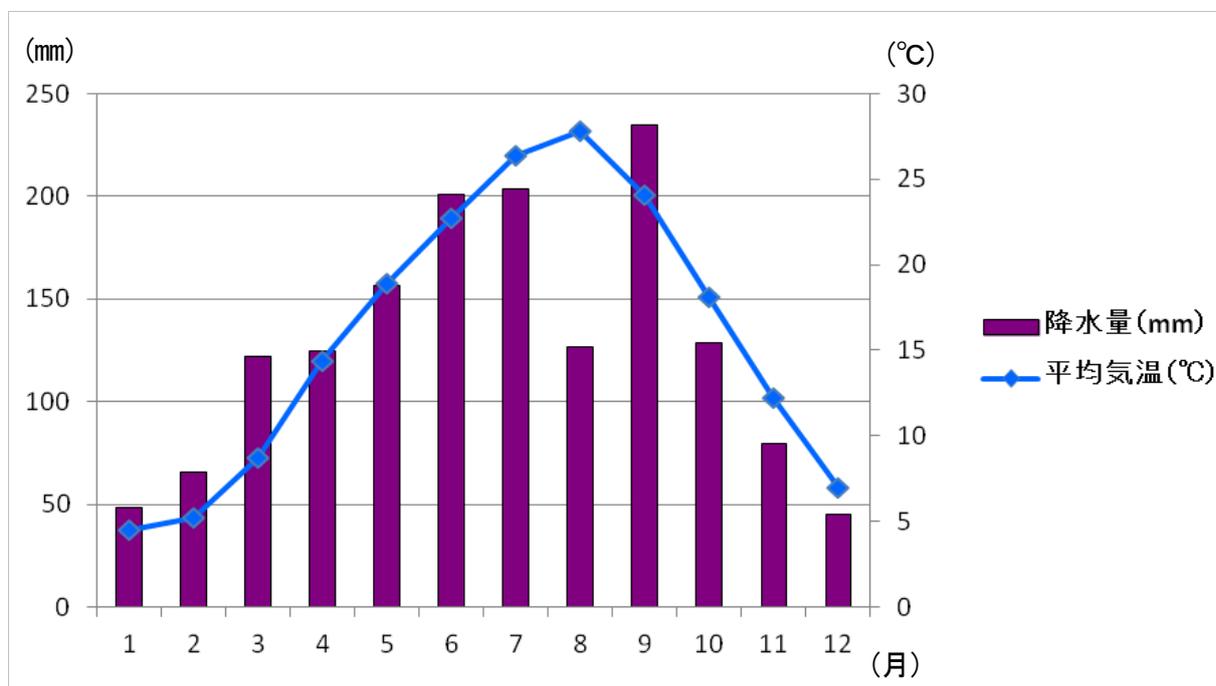


図 1-3 気温・降水量の変化(1981～2010年の平均値) 名古屋地方気象台ホームページより

(2) 社会的環境

名古屋市は、愛知県の県庁所在地であるとともに、中部圏の政治・経済・文化などにおいて中心的な役割を担う大都市であり、企業の本支店、官公庁、教育機関、病院、商業施設などが集積している。



写真 1-1 市中心部の栄地区



写真 1-2 三の丸の官庁街

①人口と面積

名古屋市の人口は、明治 22 年（1889）の市制施行当時には、約 16 万人であったが、昭和 9 年（1934）には 100 万人を突破し、現在は、約 226 万人で、東京都区部、横浜市、大阪市に続く規模となっている。市域は、当初、旧城下町の範囲を中心とする約 13.3 km²であったが、明治 40 年（1907）に熱田町を合併、大正 10 年（1921）には近隣 16 町村を編入合併、戦後も昭和 30 年代に周辺市町村を編入合併するなど段階的に拡張し、昭和 39 年（1964）に知多郡大高町・有松町を加えてほぼ現市域となった。現在の名古屋市の面積は 326.43 km²である。

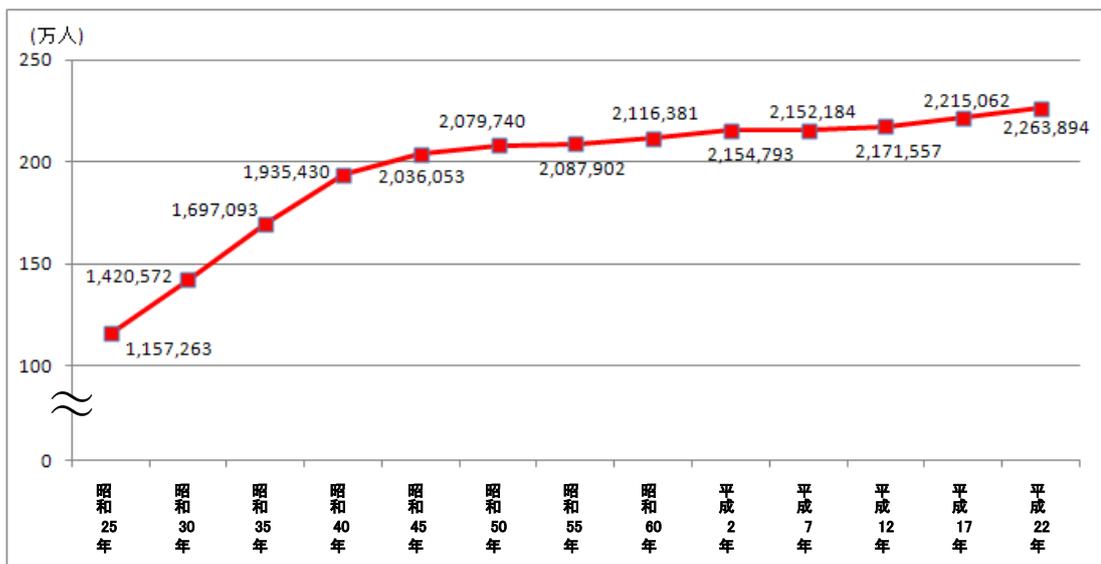


図 1-4 現市域における人口の推移(国勢調査をもとに作成)

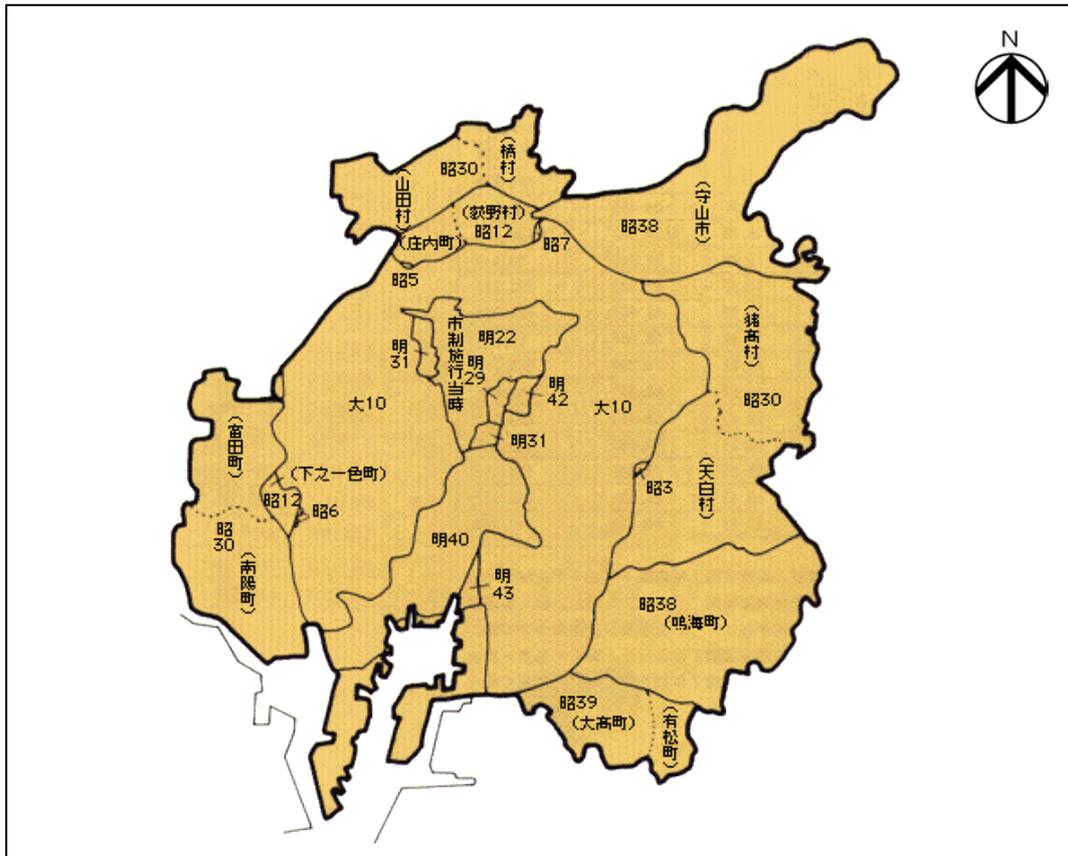


図 1-5 市域変遷図

②土地利用

名古屋市は、市域全域が都市計画区域となっており、現在の本市の市街化区域面積は、約 3 万 258 ヘクタールで市域面積の約 93%を占めている。用途地域の構成としては、商業系が市街化区域全体の約 16%、住居系が約 62%、工業系が約 23%となっている。

都心部（栄地区）は、江戸時代に整備された^{ごばんわり}碁盤割の城下町の上に、商業施設等が集中し、繁華街を形成している。また、名古屋市では、地下鉄が開業した昭和 30 年代以降、地下街が盛んに建設され、現在、栄地区と名古屋駅地区を中心に約 17 万 m²の地下街が形成されている。

住宅地は明治以降、耕地整理や土地区画整理などにより造成され、戦後も土地区画整理や周辺市町村との合併などにもない拡大した。現在、市域の広い範囲が住宅地として利用されている。また、臨海部は、工業・流通系の用地となっている。

樹木、芝・草地、農地、水面の合計面積が市域面積に占める割合（緑被率）は 23.3%（平成 22 年度調査結果）である。

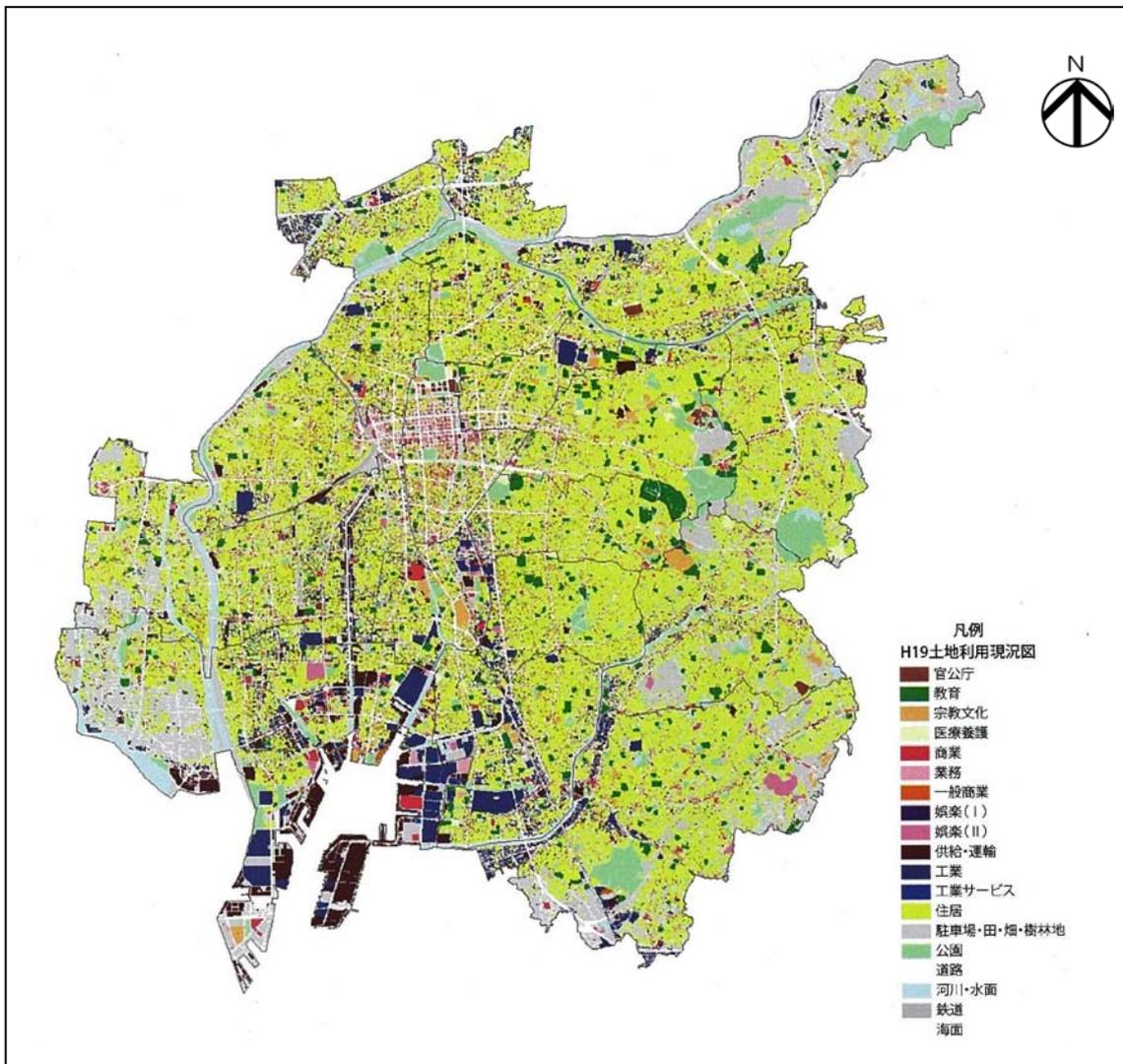


図 1-6 土地利用状況

③交通網

名古屋市内には、東名高速道路・伊勢湾岸自動車道や国道1号など国土の広域ネットワークを形成する道路が通り、都市圏の道路網としては、名古屋高速道路をはじめ、2つの環状道路や戦災復興計画に由来する広幅員道路などが整備されている。

また、空の玄関としては、中部国際空港、県営名古屋空港が近隣市町に立地しており、航空路線で国内外の各地と結ばれている。

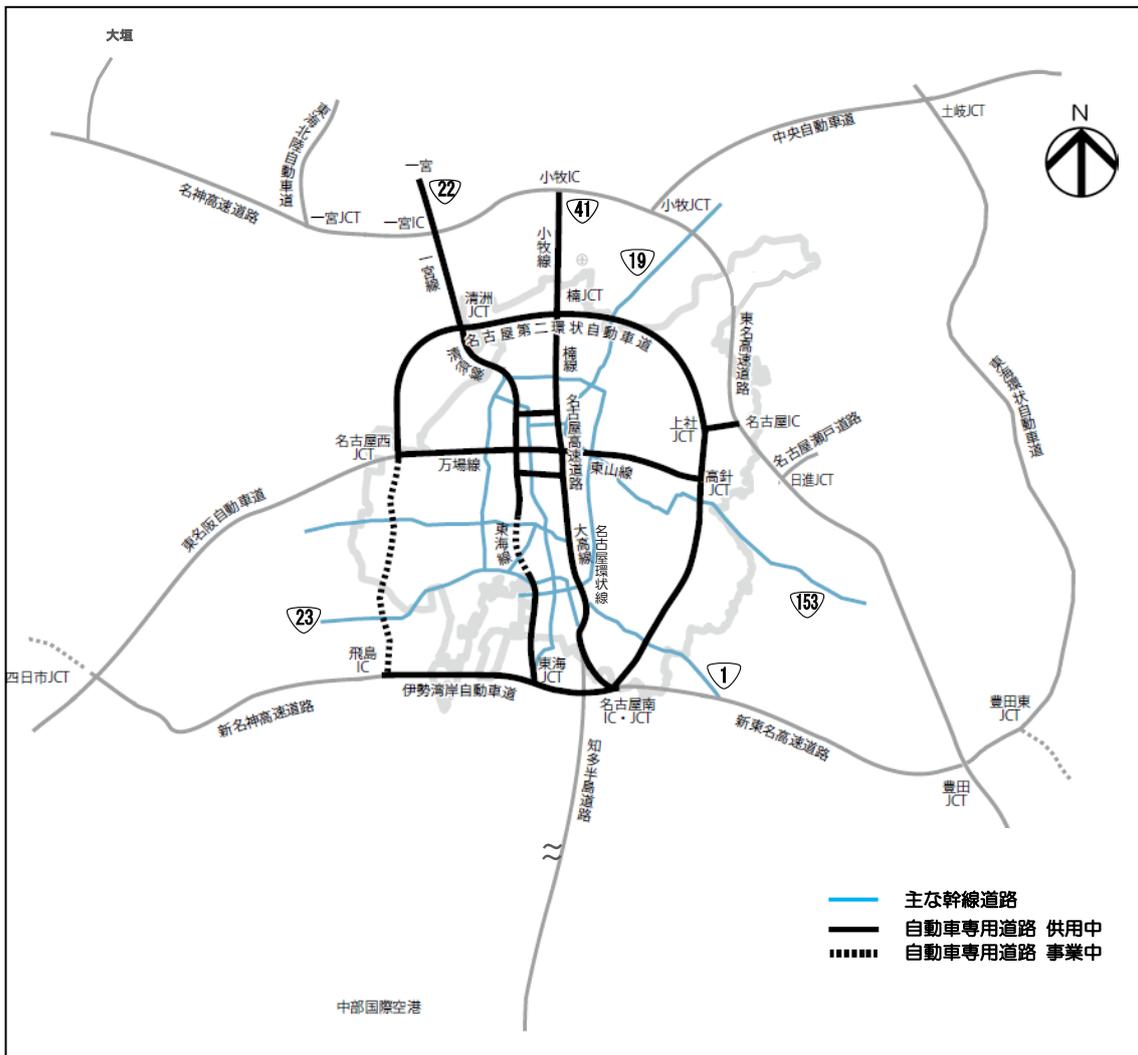


図 1-7 道路ネットワーク

鉄道はJR東海道新幹線、JR東海道線、名古屋鉄道、近畿日本鉄道などが乗り入れ、主要な路線が接続する名古屋駅は東海地方における一大ターミナルとなっている。市営地下鉄は、昭和32年（1957）の開業以来、営業キロを伸ばし、現在93.3 kmを運行している。なお、地下鉄名城線は、平成16年（2004）に日本で最初の環状運転を開始した地下鉄路線であり、名古屋城と熱田神宮を結ぶ路線でもある。地下鉄とネットワークを組む市バスは、公営バスでは東京都営バス（786 km）に次いで全国で2番目となる751 kmで営業している。市バス路線の一部分である基幹バスは、全国で初めて中央走行方式が採用され、バス運行の定時性が確保されている。また、専用高架と一般道からなるガイドウェイバス「ゆとりーとライン」は守山区志段味方面の利便性を高めている。名古屋臨海高速鉄道「あおなみ線」は、名古屋駅と名古屋港の金城ふ頭駅とを結んでいる。

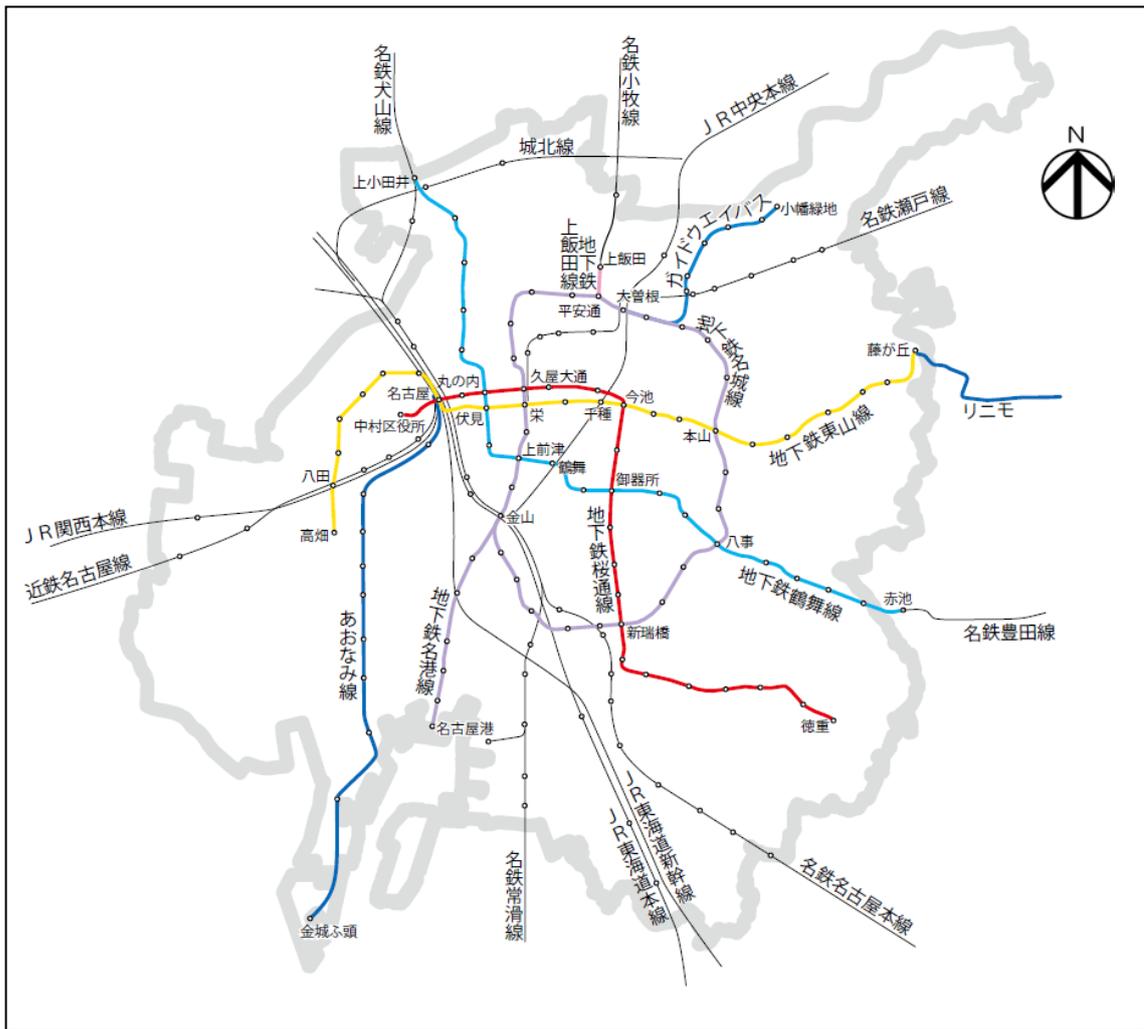


図 1-8 鉄道ネットワーク

④産業

市を中心とした名古屋圏は、古くから繊維、陶磁器、自動車、工作機械など「ものづくり産業」が集積し、東京、大阪圏とともに、日本の3大経済圏の一つを形成してきた。名古屋市は、一国の経済規模にも匹敵する世界的なものづくりの中核圏域である、名古屋圏（愛知県・岐阜県・三重県）の中心都市として発展してきた。名古屋圏（愛知県・岐阜県・三重県）の経済規模は、都道府県別県民総生産で見ると国内の約1割を占め、韓国やオーストラリアの1/2に匹敵する規模である。

名古屋圏の主要経済指標のうち、対全国比10%を超える指標として、第2次産業総生産は全国比15.3%があげられ、名古屋圏が製造業中心の産業構造であることがわかる。しかし、名古屋圏の特徴である第2次産業に関する指標は、本市においては大きなウェイトを占めておらず、本市は、製造業が牽引する名古屋圏の中心都市として、商業及びサービス部門を担っている。

産業構造について、製造業の集積が名古屋圏では38.6%と他の都市圏に比べ高くなっているものの、本市では12.4%と小さく、反面、卸売・小売業のシェアが27.8%と高くなっている。また、海の玄関口となる名古屋港は、取扱貨物量・貿易額日本一を誇っている。

名古屋市は平成元年の「デザイン都市宣言」以降、世界デザイン博覧会の開催や国際デザインセンターの設立など、行政と民間が一体となってデザインをキーワードとした産業の振興やまちづくりに取り組んできた。平成20年には国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)の制度である「クリエイティブ・シティズ・ネットワーク(デザイン分野)」に加盟認定され、豊かな創造性あふれる魅力的な都市づくりを推進している。

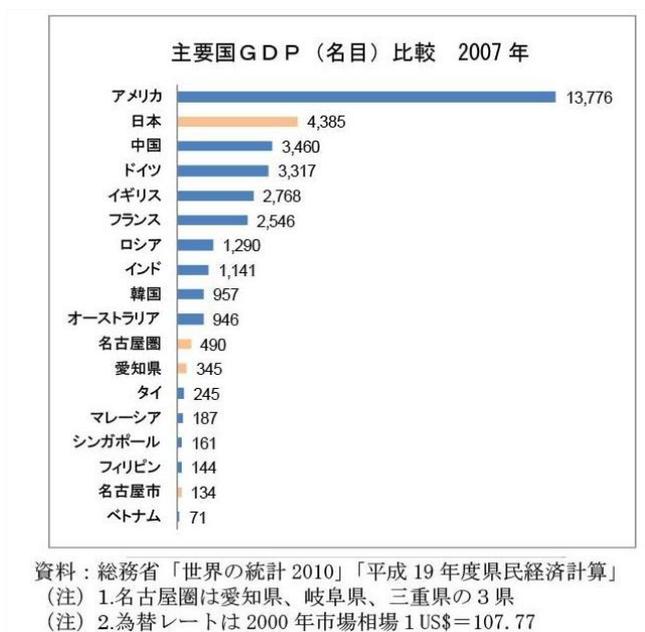


図 1-9 経済規模の比較

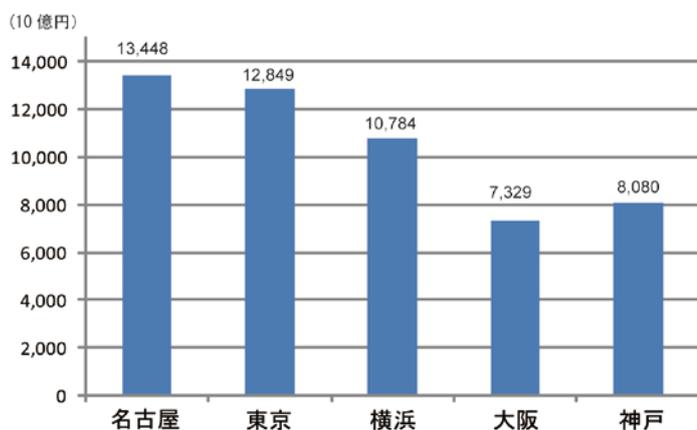


図 1-10 五大港の外国貿易額

平成23年全国港別貿易額順位表(名古屋税関)より作成

(3) 歴史的環境

①縄文・弥生時代

名古屋の地に人々が住み始めたのは、今からおよそ 3 万年前の旧石器時代である。その後、およそ 1 万 2 千年前に始まった縄文時代には、土器と弓矢を持った人々が次第に定住を始める。この頃は、台地や丘陵の奥部まで海が浸入し、現市域の西側は大部分が海であった。当時の海岸線は緑区上ノ山、銚ノ木、南区粕畑、瑞穂区大曲輪などにある貝塚の存在から推定できる。縄文時代が終わりを告げる 3,000 年ほど前には守山区牛牧、緑区雷・矢切などに大規模な集落が誕生したが、やがて西日本から東進してきた新たな文化と入れ替わることになる。

名古屋における最初の弥生時代の集落は、西区貝田町と北区西志賀町の接するあたりに営まれた。この集落遺跡からは、弥生文化の特徴であり西日本からの稲作文化の伝播を示す遠賀川式土器などが出土している。

やがて弥生人は熱田台地の南、熱田区高蔵周辺、瑞穂台地の瑞穂区牧町一帯などに居住空間を広げ、大小の集落を形成するが、近畿地方から押し寄せてきた大和王権に次第に組み込まれていった。

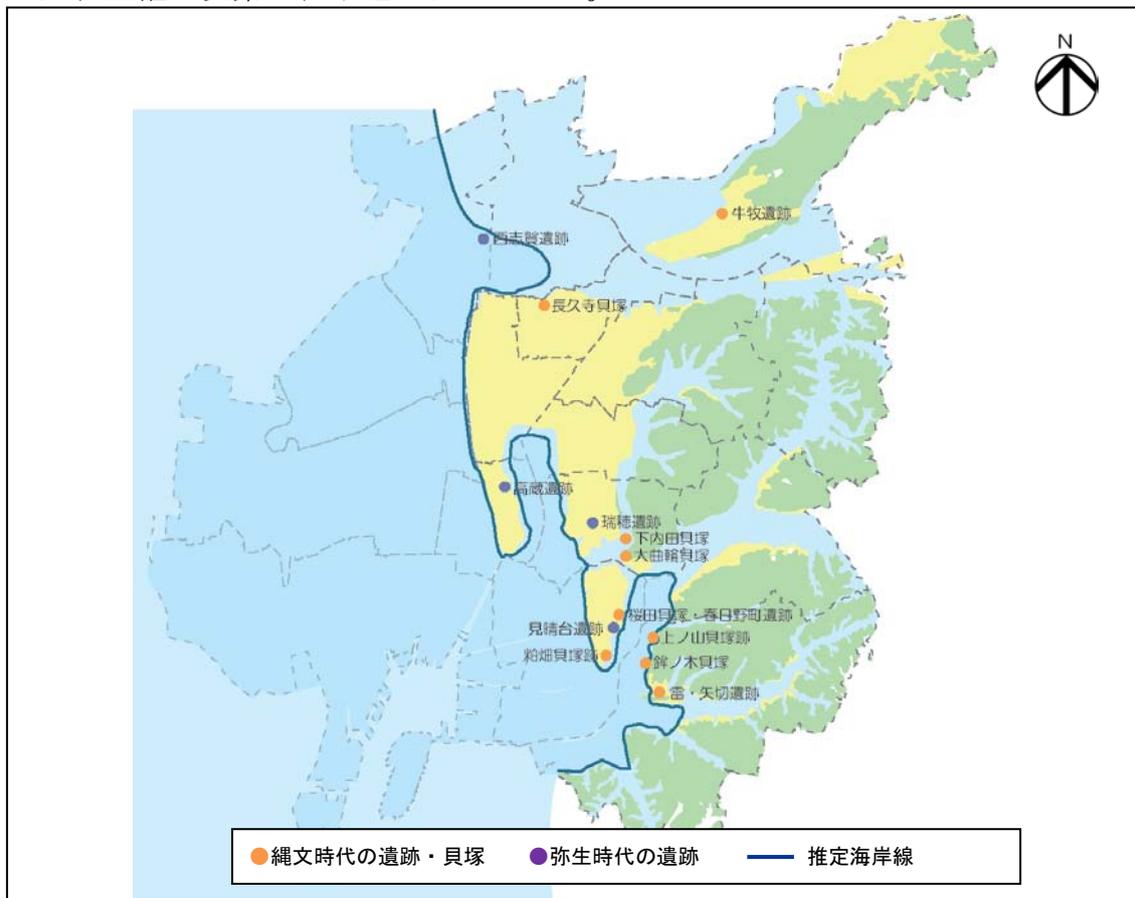


図 1-11 縄文・弥生時代の主な遺跡

②古墳時代

古墳時代になると、それまで名古屋近辺に散在していた様々な勢力は、畿内王権に近づいていった。そうした勢力の中から尾張の支配権を握る「尾張氏」が誕生し、5世紀の末頃までには尾張一円の統一をほぼ終え、畿内王権の支配下に組み込まれた。さらに尾張氏は、一族の女性を天皇に嫁がせ天皇家の外戚として王権内での地位をゆるぎないものにしていった。

現市域には、守山区の志段味地区や台地部に古代勢力が築いた古墳が残されている。

守山区志段味には、4世紀前半、尾張で最古の部類に属する大型の前方後円墳である白鳥塚古墳（史跡）が築造され、その後、古墳時代の全時期を通じて断続的に古墳が築かれた。志段味の古墳からは、当時の最新式の武具などが出土しており、大和大権との関係の深さがうかがわれる。志段味に古墳を築いた勢力が、やがて台地部へと進出し、濃尾の王として君臨した尾張氏へと発展していった。熱田台地の西縁部に築かれた断夫山古墳（全長 150m）は、尾張氏による尾張統一の記念碑的な首長墓であると考えられている。

また、5世紀中頃になると、当時先進的なやきものであった須恵器の生産が始まった。名古屋市東部丘陵一帯から猿投山（豊田市）にかけての地域は、やきものの原料に適した地層が広範に分布する地域であり、古代から中世にかけて灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗などの一大生産地として栄えた（猿投山西南麓古窯跡群）。その系譜は今日の瀬戸・美濃・常滑など日本を代表する窯業生産地へと引き継がれている。



写真 1-3 断夫山古墳(史跡)



写真 1-4 池下古墳の須恵器

③古代～中世

大化元年（645）、隋・唐の律令制にならった中央集権国家が成立し、公地公民による体系的な土地支配体制が確立する。尾張国には、中島、海部、葉栗、丹羽、春部、山田、愛智、智多の8郡が置かれた。尾張国の政治の中枢である国衙は中島郡の稲沢（現 稲沢市）に設置された。

古墳時代にこの地を統一した尾張氏などの在地豪族は、7世紀中ごろからは古墳に代わって寺院を建立するようになり、熱田台地上には、尾張氏の氏寺とされる尾張元興寺が建立された。また、8世紀には稲沢の尾張国分寺建立と呼応するように、小幡廃寺（現 守山区）、古観音廃寺（現 昭和区）、鳴海廃寺（現 緑区）などの古代寺院が建立されていったことが考古資料から明らかになっている。

古代から現在まで続く神社の記録としては、平安時代の延喜年間（901～923）にまとめられた『延喜式』の「神名帳」に、熱田神宮（熱田区）、氷上姉子神社（緑区）、尾張戸神社（守山区）などにあたる神社名が見られる。熱田神宮に関する記録はこの他にも様々な文献が残り、古代から重要な存在であったことがうかがえる。

10世紀末から11世紀前半になると、市域周辺部を大きくとり囲むように流れる庄内川流域や、河口近くの扇状地などに荘園が形成されていった。富田荘（現 中川区富田町など）や安食荘（現 北区など）は、残された絵図や史料により位置や地割などを知ることができ、当時の土地利用の状況を今に伝える貴重な存在である。

荘園が次々と成立するなか、「那古野（名古屋）」という地名も登場してくる。平安時代末期に成立した那古野荘は、後白河上皇の女御で高倉天皇の生母である建春門院に寄進された皇室領荘園で、現在の市中心部の位置する名古屋台地北部を中心とする荘園と推定されている。この荘園の名である「那古野」は、中世以降の文献によると、「那古屋」・「名護屋」・「名古屋」とも表記されており、この地が古くから「なごや」と呼ばれていたことが分かる。

【コラム】熱田大宮司家と源頼朝

熱田神宮を管理する大宮司^{だいぐうじ}の職は、古代以来尾張氏が世襲してきたが、平安時代末期に、大宮司尾張員職^{かずもと}の娘が尾張国司として赴任してきた藤原季兼^{すえかね}（1101年没）と結婚し、その子である藤原季範^{すえのり}が大宮司職を継いだ。これ以後、その子孫が大宮司の職を世襲することになり、ここに尾張氏から藤原氏への大宮司職の交替が行われたのであった。藤原季範は、京都で院政を行っていた鳥羽上皇に仕え、同じく鳥羽上皇の側近であった源義朝に娘を嫁がせた。この季範の娘の産んだ子の一人が後の源頼朝であり、現在の誓願寺（熱田区）付近が頼朝の出生地として伝えられている。



写真 1-5 誓願寺

鎌倉に幕府が開かれると、京・鎌倉間を結んだ鎌倉街道を商人・旅行者などの人々が往来するようになった。現市域とその周辺の様子は『十六夜日記』(阿仏尼)や『海道記』などの紀行文にも描かれている。また、『一遍聖絵』には、弘安6年(1283)に一遍らの一行が甚目寺(現 あま市)を訪れた様子とともに、門前に集まる人々の様子が描かれている。こうした街道沿いの人々の交流もこの地域の生活・文化に影響を与えていった。

古代において灰釉陶器を全国に供給していた尾張の猿投窯では、11世紀末から12世紀初頭にかけて山茶碗と呼ばれる粗雑な日常雑器の量産に変わり、鳴海・有松地区に多数の窯が築かれていった。一方、施釉陶器の生産の中心地は瀬戸と常滑(いずれも日本六古窯に含まれる)に移った。その後、13世紀後半に東濃地方で山茶碗の生産が盛んになると、猿投窯で量産されてきた山茶碗は生産が縮小され、終焉に向かっていった。

室町時代、尾張では足利一門の有力家である斯波氏が守護となり、斯波氏の尾張支配を補佐する守護代として、織田氏が越前国から尾張国に移ってきた。

また、この頃には、足利氏の流れを汲む今川那古野氏が名古屋台地北部の那古野の地を領有していた。今川那古野氏は、この地に那古野城を築いたとされる。

応仁の乱の後、尾張は織田氏一族が割拠する状態となったが、その中で、織田信長の祖父にあたる信貞(信定)は、勝幡(現 愛西市)に城を築き、当時湊町として栄えた津島をおさえて力を蓄えた。天文7年(1538)頃、信長の父・信秀は、今川那古野氏の那古野城を攻略し、本拠地を那古野の地に移した。しかしながら、信秀・信長とも、那古野城に長くとどまることはなく、名古屋台地に城下町が築かれたのは、豊臣秀吉による天下統一事業とその後の関ヶ原の戦いを経た慶長15年(1610)のことであった。

一方、中世における熱田は、この地の土豪加藤家と熱田社の社家(大宮司)である千秋家が実質的に支配していた。中世末には、門前の賑わいとその経済力に目を付けた織田信秀・信長の掌中に治められ、その庇護を受けることとなる。加藤家は、商業・金融業・運輸業を営んだ旧家で、本家筋を東加藤(図書助)、分家筋を西加藤(隼人佐)といった。加藤家は、織田信秀の命を受け幼少の徳川家康(竹千代)を預かっていたことでも知られている。

熱田浜に魚市場ができ、独占的な問屋が登場するのもこのころのこととされている。古来、尾張氏の祭神を祀る熱田社の門前町として発展してきた熱田は、中世以降、伊勢湾最奥部の漁師町・湊町として栄えていったのである。



図 1-12 城・砦、古戦場等の位置とゆかりの人物

弘治 2 年（1556）、信長は清須城に入り、尾張国内を統一する一方、今川家の圧力に対抗するため、大高城・鳴海城（いずれも緑区）を取り囲むように複数の砦を築いた。

永禄 3 年（1560）、今川義元は駿府を発ち、尾張に侵攻した。信長は清須より出陣し、兵を進めた義元を桶狭間で討ち取った。劣勢をはねのけた桶狭間での勝利により、信長の名は全国にとどろき、その後、岐阜、北陸、近畿へと進出して天下統一の足掛かりを築いていったのである。なお、桶狭間の戦い当時、松平元康（のちの徳川家康）は今川方として従軍しており、決戦を前にして大高城へ兵糧を運び入れて、名声を高めたと伝えられている。

天正 10 年（1582）、天下統一に邁進していた信長は、明智光秀の謀反により本能寺にたおれた。主君の弔合戦と称して備中高松城の戦場から軍を返した羽柴秀吉は、山崎の戦いで明智光秀を討ち、にわかに中央に躍り出た。

秀吉は、天正 12 年（1584）、小牧・長久手の戦いで徳川家康・織田信雄連合軍と講和を結び、信長の後継者としての地位を不動のものにした。小牧・長久手の戦いは、犬山城、小牧城などを拠点に尾張各所で小競り合いが行われ、現市域では、一時、龍泉寺城の秀吉軍と、小幡城の家康軍が対峙した（いずれも守山区）。龍泉寺はこの時、秀吉軍によって焼き払われている（慶長年間に再興）。

その後、秀吉は、四国・九州を平定し、小田原攻めの後、家康を関東に封じて天下統一を成し遂げた。

慶長3年（1598）、秀吉が伏見城に没すると、天下の勢力図は豊臣と徳川に二分された。慶長5年（1600）、関ヶ原において、天下分け目の決戦が行われ、これに勝利した徳川により江戸時代の幕が開くことになる。これにより、名古屋は開府前夜を迎えるのである。

【コラム】多くの武将を輩出した地

天下統一を進めた織田信長、豊臣秀吉が、尾張の出身であることはよく知られているが、尾張はこれらの人物に従って栄達を遂げた多くの武将を輩出した地でもある。

信長の重臣には、平手政秀、林通勝^{みちかつ}、柴田勝家、佐久間信盛、丹羽長秀などがいた。いずれも信長の出世に大きく関わった武将たちである。これらの武将のゆかりの地として伝わるのは、平手政秀の屋敷があったとされる志賀（北区）、柴田勝家の出身地とされる下社^{しもやしろ}（名東区）などである。また、信長の馬廻りから出世した武将に、荒子（中川区）城主前田利昌の四男であった前田利家や、比良（西区）城主の末子とされる佐々成政などがある。

秀吉の家臣としては、秀吉と同じく中村（中村区）出身の加藤清正や二ッ寺（あま市）出身の福島正則がある。どちらも、年少の頃から小姓として秀吉に仕え、秀吉による天下統一によって大名にまで出世していく。いずれも、関ヶ原の戦いでは東軍につき、のちに名古屋城と城下の建設に大きく関わった。

④近世

関ヶ原の戦い後、家康は四男の松平忠吉に尾張一国を与え、忠吉は清須城に入った。しかし、慶長 12 年（1607）年、忠吉は 28 歳の若さで死去した。その後家康は、九男の義直に忠吉の遺領をつがせることとし、同年、義直は若干 7 歳で尾張藩のあるじとなった。

慶長 14 年（1609）1 月、家康は、名古屋城の築城と清洲からの遷府を正式に決定し、翌年から名古屋城の築城が始まった。

それまで尾張の中心であった清須から名古屋への遷府が行われた理由には、関ヶ原の戦い後も大阪城にある豊臣秀頼と豊臣恩顧の西国大名たちとの戦いに備えるためということが挙げられる。また、名古屋の地は伊勢湾からほどよい距離にあることから、戦略上の利点とともに、城下町の都市的発展を意図したとも考えられている。

名古屋城築城にあたり、家康は、豊臣恩顧の大名たちに助役を命じた。これにより彼らの経済力を弱めて謀反の意図をくじくことを狙ったといわれる。これがいわゆる「天下普請」であり、家康は有力な外様大名の力をそぎつつ、自らの権力を支える城郭を築いていった。

名古屋城の普請は、慶長 15 年（1610）6 月から始められた。石垣の築き上げは極めて迅速に行われ、同年 8 月 27 日には、加藤清正が独力で請け負った大小の天守台が完成した。また、9 月中には、内郭（本丸、二之丸、西之丸、深井丸）の大部分の普請が完成したという。

内郭の普請が完成すると、続いて天守、櫓、門などの作事が行われた。慶長 17 年（1612）には天守の棟上が行われ、その年の暮れには大天守が完成して金鯱が棟に上がった。続いて慶長 19 年（1614）に入ると本丸御殿の造営が始まり、狩野派の狩野定信が名古屋に派遣されて障壁画が描かれた。

城下町の建設は、前時代に尾張の中心であった清洲城下からの「清洲越」によって行われた。これは、町人や職人などの住民はもちろん、寺社や町名をも含めた都市ぐるみの移転であった。

名古屋城下町は名古屋城を北端とし、名古屋台地上に逆三角形を描くように建設された。三之丸の南側に「碁盤割」と呼ばれる町人地を置き、それを取り囲むように武家地を、さらにその東側と南側に寺町が配置された。碁盤割には、清洲越の商家や職人、新住人を住ませた。また、福島正則を普請奉行に堀川の開削が行われ、これにより、名古屋城と熱田の湊が結ばれ、水運による物流が可能になった。

名古屋城の築城と清洲越に始まる城下町の建設により、現在まで続く名古屋

のまちは初めてその姿を現した。以後、名古屋城下町は賑わいを続け、都市の拡大と文化の蓄積がなされていくのである。



図 1-13 名古屋城絵図 正保4年(1647)

元和2年(1616)、徳川家康が死去すると、義直はそれまで生活していた駿府から名古屋に移り、このときより名古屋城は尾張藩主義直の居城としての歩みを始めた。義直は、はじめ本丸に入ったが、元和6年(1620)には、本丸から二之丸御殿に移り、以後、二之丸御殿が尾張藩における政治の中心となって「御城」と呼ばれた。

義直が治めた尾張藩は、尾張に加え、美濃、信濃、三河、近江、摂津のそれぞれ一部を範囲域とする約62万石の大藩であった。尾張藩は、広大な濃尾平野や良材に恵まれた木曾山などを抱えていたことから、実際には石高以上の実収高があったとされる。また、家康の九男であった義直は、同じく家康の10男で紀伊藩主



図 1-14 徳川義直 肖像

となった頼宣よりのぶ、同 11 男で水戸藩主となった頼房よりのふさに対して長兄であったため、尾張藩は御三家筆頭と目され、将軍に事故があるときに次の将軍を輩出すべき家柄であった。

義直は、家康の好学の気風を受けて学を尊んだ。林羅山はやしらざんなどの儒学者を招いて講義をさせるのみならず、江戸や名古屋城内に儒者の像を安置する聖堂を建てた。また、自ら歴史書『類聚るいしゅう日本記』や神社の由来や祭神の考察を記した『神祇宝典じんぎほうてん』を著している。義直は、家康の形見分けである『駿河御譲り本』を収蔵する「御文庫」を城内に建てており、これは今日の蓬左文庫ほうさのもととなっている。

義直は、立藩もない尾張藩政の基礎をかため、農業用のため池や新田の開発に尽力した。さらに瀬戸の窯業の保護・奨励に力をそそぐなど幅広い政策を推進した。

義直の跡を継いだ 2 代藩主光友みつともは、万治 3 年（1660）に発生した「万治の大火」を機に堀切通りを拡幅した。これが今日まで残る広小路の始まりである。光友はさらに、若宮八幡社の整備や橘町たちばなちょうの開発など城下町南部の都市計画を積極的に進めた。光友は、芝居の興業権を橘町にも認め、南の寺町界限は、城下の盛り場・歓楽街として発展していった。

こうした城下の賑わいに拍車をかけたのが、享保 15 年（1730）に 7 代藩主となった宗春である。当時、8 代将軍吉宗は、緊縮政策（享保の改革）を進めていたが、宗春はこれと真っ向から対立し、芝居小屋の増設、遊郭の新設、藩士の芝居見物を許可した。宗春は自らも、猩々緋の装束をして白牛に乗り、唐人笠を被り、5 尺もあるキセルを携えて町に繰り出したという。

宗春時代の名古屋の繁盛ぶりは『ゆめのあと』と総称される一群の書物や『享元絵巻』に見ることができる。



複製：名古屋市博物館蔵

図 1-15 享元絵巻(部分)

『享元絵巻』は宗春時代の名古屋の賑わいを絵画で表現したもので、広小路以南の本町通を中心に描いたものである。そこには、若宮八幡、清寿院、七寺など寺院のほかに^{やぐら}櫓をあげた芝居小屋が数多く描かれている。芝居小屋は常設の立派な劇場もあったようで、京や大坂の歌舞伎役者が次々と訪れた。また、宗春の許可した、西小路・富士見小路・葛町などの遊郭には、享保の改革による風俗取り締まりによって各地で営業が成り立たなくなっていた遊女たちが集まったという。

宗春の時代は芝居や遊郭が人気を集めるとともに、様々な商売が盛んとなった。いろいろな食べ物が売られるようになり、本町通とその周辺には、餅・だんご・木^{でんがく}の芽田楽、うどん、どじょう汁などを出す店があった。

宗春の政治は、消費や経済の活性化をはかり、「芸どころ名古屋」を築くことになったが、宗春と幕府との対立は深まり、元文4年（1739）、宗春はついに隠居謹慎を命ぜられて失脚した。

宗春の失脚後、遊郭の廃止や芝居小屋の営業禁止などにより、名古屋城下は火の消えたような状況となったが、19世紀初頭には芝居興行が復活し、賑わいを取り戻していった。そして、この後、文化文政期（1804～1829）にかけて名古屋の町人文化は頂点に達した。

名古屋城下町は、北東は^{おおぞね}大曾根村、北西は^{びわじま}枇杷島村、南は^{ひおき}日置村・前津小林村・古渡村に接していた。城下町からは、美濃街道、木曾街道、下街道、岡崎街道など周辺へつながる街道が伸び、城下町の南方 5.5km ほどのところに位置する熱田の町とは本町通（熱田みち）で結ばれていた。

江戸時代初頭、名古屋台地上には名古屋城下町と熱田という2つの拠点があり、それぞれが異なった産業と経済圏、文化圏を形成していた。熱田の町は東海道の宿駅が置かれたこともあって発展し、時代を経るにつれ、名古屋城下町と一体となって都市機能を発揮するようになっていった。

城下町の発展にともなって、周辺の農村も消費都市を支えるための野菜栽培などが活発に行われるようになり、現金収入を得るといふ経済的な恩恵を被ることになった。『尾張名所図会』に描かれた御器所村（現昭和区御器所町）の沢庵漬の様子や、熱田魚市場（現熱田区木之目町）、枇杷島青物市場（現西区東枇杷島町・清須市西枇杷島町）の活況からもそれをうかがい知ることがで



図 1-16 御器所の沢庵漬（『尾張名所図会』より）

きる。

更に、藩財政の基盤をなす米生産の向上のために農地の拡大が計られ、伊勢湾沿岸部の埋め立てによる新田開発が尾張藩主導のもと、富裕商人によって開始される。これによってあらたに誕生した村々では、町には無い農村部独特の年中行事や祭りが行われた。

このように、名古屋城下町や熱田の縁辺にはそれぞれ異なる伝統・文化・生活様式を引き継ぐ村々が広がっていた。現在の名古屋市は、このような地域特性を基盤に発展した町や村の集合体なのである。



図 1-17 名古屋城下とその周辺(「名古屋並熱田絵図」より)

⑤近代

明治2年(1869)、尾張藩は藩籍を奉還し名古屋藩と改称し、明治4年(1871)には、廃藩置県によって名古屋県となった。名古屋城と城下町も大きな変化の時代を迎えることになる。

明治4年(1871)、名古屋城は、三之丸の門や武家屋敷から取り壊しが始まり、三之丸東北の御屋形に移住していた先の17代藩主徳川慶勝^{よしかつ}も退去を余儀なくされて、東京浅草瓦町へ居を移した。ここに、名古屋城における尾張徳川家の営みは消滅したのであった。

明治6年(1873)には、本丸、二之丸、三之丸のすべてが陸軍省の所管となり、名古屋鎮台(明治21年(1888)第三師団と改称)が置かれた。これにともない城内に軍の施設が建設され、二之丸御殿をはじめとする多くの建物が取り壊された。これより先に、天守閣の金鯨も引き下ろされている。金鯨は熱田湊から船で東京へ運ばれたのち、ウィーン万博をはじめ各地の博覧会に出品されたが、地元の財界人(伊藤次郎左衛門・関戸彦彦・岡谷惣助)の返還嘆願が叶い、明治11年(1878)、8年ぶりに天守に戻っている。

明治20年代、旧尾張徳川家下屋敷(大曾根邸、現東区徳川町)の整備が完了すると、18代当主徳川義禮^{よしあきら}は名古屋移住を決意し、明治26年(1893)、尾張徳川家の伝統が名古屋の地で復活した。この後、大曾根邸の大部分は19代当主の徳川義親によって、昭和6年(1931)に名古屋市に寄贈された。この地に設置された徳川美術館(徳川黎明会)と名古屋市蓬左文庫には、現在も尾張徳川家に伝来した貴重な資料がほぼ完全な状態で收藏されている。

名古屋城の本丸部分は、明治26年(1893)に陸軍省から宮内省に所管換えとなり、その後、本丸御殿は名古屋離宮として、皇族の宿泊に度々使用された。離宮は昭和5年(1930)に廃止され、本丸・西之丸・深井丸の土地と建物が名古屋市に下賜された。同年、大天守・小天守・本丸御殿・櫓4棟・門6棟が国宝に指定され、昭和6年(1931)からは、市民に公開されることとなった。

明治維新後、名古屋では紡績や陶磁器などを皮切りに産業発展が進み、明治10年代には、士族授産・殖産興業政策をうけて、織物・綿紡績・陶磁器・時計・マッチ・電灯などの分野で近代的な工業の創設が進められた。



写真 1-6 金鯨のない天守閣
(明治5年頃)

明治19年(1886)5月1日には東海道線の名古屋駅が開業した。これにともない、広小路が笹島まで延伸・拡幅され、広小路が近代都市名古屋の主要幹線として発展していくこととなった。

明治21年(1888)4月に公布された「市制町村制」により、明治22年(1889)10月1日、名古屋市が誕生した。当時の市域は、東西約4.93km、南北約5.45km、面積約13.34km²であった。名古屋城を底辺として南にのびた逆三角形の形状をしており、かつての城下町と重なる部分が多かった。

明治31年(1898)には、京都の伏見線に次いで国内2番目となる電気鉄道(名古屋停車場～久屋町の愛知県庁前)が誕生した。また、明治33年(1900)には中央線の名古屋～多治見間が開通し、千種駅が開業した。千種駅の開設は、市街地が東に向かって拡大するきっかけとなった。

明治20～30年代には、機械器具の発明・改良が一気に花開き、木製人力織機が発明されるとともに、自転車部品や鉄道車輛などの製造が始まった。また、全国シェアの首位を占め続ける陶磁器産業では、次々と大規模な輸出向け洋式陶磁器メーカーが設立された。電力会社は合併により大規模化し、ガス事業においても新会社が設立された。

港湾の建設工事は明治31年(1898)に始まった。港湾は当初、熱田港として建設されていたが、明治40年(1907)、熱田町が名古屋市に編入されたのを受け、名古屋港に改められ、同年11月10日に開港した。なお、熱田町の合併は城下町起源の名古屋と港町熱田が行政的に一体となるという画期的な出来事であった。

名古屋台地の東側を流れる精進川^{しょうじんがわ}は、周辺の工場に物資を運ぶ水運として産業発展に貢献してきたが、高低差がないために度々氾濫し、改修工事的必要性が高まっていた。明治37年(1904)、東京砲兵工廠^{しょう}熱田兵器製造所が建設されることになり、その敷地造成のための土砂の確保を兼ねて、精進川の開削が行われることになった。これにより長年の懸案が解消されたのである。明治44年(1911)、精進川は新堀川と改められた。



写真 1-7 名古屋港
(明治40～大正2年)

さらに、この精進川開削の残土をもって、のちに鶴舞公園^{つるま}として整備される第10回関西府県連合共進会の会場が造成された。明治43年(1910)に行われた第10回関西府県連合共進会は、産業振興を目的としたもので、参加府県数、会場の面積、建物の総面積、出品数のどれをとっても旧来の規模を大きく上回るものであり、当時の名古屋の産業を急速に発展させる一大原動力となった。

この他の治水事業としては、明治6年（1883）、舟運と農業用水の確保を目的として、庄内川から分岐して矢田川の地下を通過して堀川にそそぐ黒川が開削された。矢田川をくぐる施設として築かれた黒川樋門が、昭和55年（1980）に現地に復元されている（北区）。

本格的な上下水道の整備は、明治末から大正時代にかけて、上下水道の整備が行われた。

上水道は、犬山城櫓下の木曾川左岸より水を取り入れる計画が採用され、明治40年（1907）から11年にわたって事業が実施された。大正3年（1914）には一部給水を開始し、大正7年（1918）に完成した。犬山で取水された水は尾張地域の中央を横断して東春日井郡鳥居松村の沈殿池に至り、さらに東区鍋屋上野町のろ過池において清浄し、電力によって東区田代町の配水池に圧送して、同所から市内各戸に配水された。現在、鍋屋上野浄水場（千種区）には、大正3年（1914）に建造された第一ポンプ所が残されている。



写真 1-8 鍋屋上野浄水場第一ポンプ所
（市指定文化財）

下水道は、明治41年（1908）から敷設工事が始まった。大正元年（1912）に初めて共用を開始し、大正12年（1923）には、旧市域に属する大部分の地域に下水道施設が完成した。敷設区域は、当時の東区、西区、中区の3区全域と南区のうち堀川と新堀川とに囲まれた区域で、その面積は約1,908ha、管路延長は約342kmであった。排水系統は、名古屋城と熱田神宮を結ぶ線を分水界として西部は堀川に、東部は新堀川に放流させるもので、混水式（合流式）により雨水、汚水ともに同一管で排水していた。

大正時代の産業は、大正3年（1914）に勃発した第一次世界大戦の拡大にともない輸出が急増した。この時期には重工業が勃興し、工業用の作業機や電気器械器具・工作機械が発展するとともに自動車や航空機生産も始まっている。

大正9年（1920）に都市計画法が施行されると、土地利用計画、街路計画、運河計画、公園計画などが相次いで決定され、都市計画事業として行われていった。これと前後して、大正10年（1921）8月には、名古屋市と周辺16町村との合併が実現した。これにより名古屋市は、市域の面積が東京市の約2倍となり全国1位（194.56km²）、人口は東京・大阪につぐ全国3位（62万2781人）の大都市となった。また、大正9年（1920）に内務省から名古屋へ赴任した石川榮耀^{ひであき}は、土地区画整理の指導育成に情熱を傾け、当時の大岩名古屋市長が「名古屋の名物は2つある、1つは金のシャチ、もう1つは区画整理だ」と賞する

ほどの成果をあげ、全国的に注目されるようになった。

大正 15 年（1926）には中川運河の工事が始まり、昭和 7 年（1932）に運河全体が完成している。中川運河開削の目的は、名古屋港と笹島貨物駅まつしげこうもんの間の貨物輸送を行うことであった。中川運河は松重閘門により堀川と結ばれ、多くの船舶がここを行き交った。

昭和 12 年（1937）、名古屋市が主催する名古屋汎太平洋平和博覧会が開催された。これは日本における最初の国際的博覧会であり、昭和 9 年（1934）に市人口が 100 万人を突破した名古屋の大都市としての発展を示すものであった。昭和 12 年（1937）は、博覧会以外

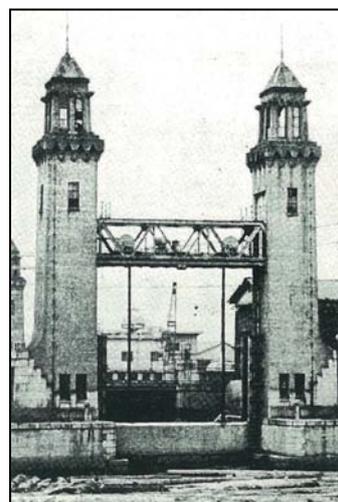


写真 1-9 松重閘門(戦前)
(現在 市指定文化財)

にも大都市名古屋の発展を印象付ける出来事の多かった年である。名古屋駅の駅舎が新築され、名古屋駅前から伸びる幅員 43.2m の桜通が完成した。また、東山植物園・動物園が相次いで開園している。名古屋駅の新駅舎や東山植物園の大温室は「東洋一」とも称された。これらの施設を結ぶ市電も新路線が敷設され、名古屋の交通網整備の上でも記念すべき年であった。



写真 1-10 汎太平洋平和博覧会会場

⑥戦後

明治・大正・昭和初期と目覚ましい発展を遂げてきた名古屋であったが、第二次世界大戦の空襲により、名古屋城天守閣などを含む、当時の市域の約 1/4 が焼失した。

昭和 20 年（1945）12 月、名古屋市は、「大中京再建構想」を発表し、大規模な戦災復興事業に取り掛かった。名古屋市の戦災復興計画は、東西南北 2 本の 100m 道路をはじめとする幹線道路の整備、市街地の墓地の東山地区への移転、小学校の隣接公園の設置など、全国的に見ても特徴のあるものであった。

この戦災復興事業により、道路、公園、駅前広場などが建設され名古屋市の都市基盤整備は大きく進んだ。また、復興の過程で、日本初の集約電波塔である名古屋テレビ塔の建設や、焼失した名古屋城天守の復元などが行われた。

郊外地では、膨らみ続ける都市人口の受け皿として、昭和 30 年代には、民間施工による区画整理事業が東山から鳴海にかけての東部丘陵などでおこなわれ、

大規模な住宅団地が建設された。

昭和 38 年（1963）には、守山市および愛知郡鳴海町を、昭和 39 年（1964）には知多郡大高町と有松町を編入合併し、現在の名古屋市域が確定した。地域の拡大と大規模な住宅地の開発、高度経済成長にともなって人口は増加し、昭和 44 年（1969）、名古屋市の人口は 200 万人を突破した。

1960 年代には、市南西部臨海地帯の埋立造成が行われ、港湾の整備が進んだ。これにより、鉄鋼・石油・ガス・セメントなど重工業分野の各社が新たな埋立造成地に進出し、60 年代後半には重化学コンビナートができて中京工業地帯の発展を支えた。

昭和 43 年（1968）に名古屋市が策定した「名古屋市将来計画」では、「国際的機能の向上」や「経済的機能の向上」とともに、「文化的機能の向上」や「豊かで住みよい都市づくり」が課題に掲げられた。名古屋はこの頃から、産業都市から中枢管理都市への転換が図られ、従来の工業中心の都市から、名古屋大都市圏の中枢機能、流通・サービス機能を担う第 3 次産業中心の都市へと転換していった。

平成元年（1989）、名古屋市は市制 100 周年を迎えた。100 周年記念事業のメインイベントとして、世界デザイン博覧会を名古屋城・白鳥・名古屋港を会場に開催し、約 1,518 万人が来場した。この他、100 周年記念事業としては、堀川の総合整備、東山スカイタワーの建設（平成元年 7 月オープン）、名古屋港における水族館構想の推進（平成 4 年開館）、新修名古屋市史の編纂などが位置づけられた。

21 世紀を迎えると環境への意識が高まり、藤前干潟（平成 14 年ラムサール条約湿地に登録）の保全や自然の叡智をテーマにした愛・地球博（2005 年日本国際博覧会）の開催をきっかけに、市民の間にごみ減量や環境保全に関する取り組みが浸透していった。

平成 22 年（2010）、名古屋は徳川家康による名古屋築城から数えて 400 年を迎えた（名古屋開府 400 年）。平成 20 年（2008）からは、戦災で焼失した名古屋城本丸御殿の復元が始まり、武家風書院造の傑作と本丸御殿の復元に向け、現代の匠の技を結集した作業が続けられており、平成 25 年（2013）5 月 29 日には、第 1 期整備として玄関と表書院の公開が始まった。